Johnson's Dictionary of the English Language

ジョンソン『英語辞典』

「ジョンソン博士」

サミュエル・ジョンソン（1709-1784）は辞書編纂者であるほかに文学者、批評家でもあり、多くの肩書きを持っていました。多才な上に、普通なら多くの人と時間を費やす辞書編纂の仕事を、ほぼ一人で成し遂げるような人物でもありました。ジョンソンの英語辞典は「英国が初めて持つ本格的な英語の辞典」でした。その完成は英国人の愛国意識をかきたて、弟子のボズウェルが伝記で明らかにした彼の人柄や数多の警句は広く愛されました。彼は敬愛を込めて Dr. Johnson（ジョンソン博士）と呼ばれ、「ジョン・ブル」（典型的英国人）の代表的な一人となりました。

辞典が作られた時代

17 世紀にイタリア、次いでフランスで、それぞれ国家的プロジェクトとして編纂された本格的な国語辞典が出版されました。同じ頃英国にはこれらの「アカデミー辞典」に匹敵するものはなく、英語の権威を確立するための辞典がつよく望まれるようになりました。英国が世界の政治・経済に存在感を強めていた時代のこと、国家の威信にかけて文化面でも大陸に遅れをとるわけにはいかなかったのです。ジョンソンが辞書出版を引き受けたのはそうした流れの中でのことでした。

当時のヨーロッパでは、言語が変化することは腐敗・堕落と受けとめられており、「乱れ」をただし「正しい」国語が保持されねばならない、というのが支配的な考え方でした。上記のアカデミー辞書編纂の目的も、自国語を保持・固定することでした。これは大陸の動きに刺激を受けた英国でも同様で、ジョンソン自身にも英語が変わっていくのをくいとめたいという考えがあったことが辞書編纂にあたって作られた計画書に記されています。しかし、完成した英語辞典の序文は「人が永遠ではないのと同じように、言語も永遠ではありえない…」と、実際の編纂作業を通して言語の変化を止めることは不可能であると諦めとともにさとったように読めます。

辞典の特徴

それまでの辞書と比較した場合のジョンソンの辞書の最大の特徴は、1）日常的・基本的な語彙を載せた一般的辞書であること、2）用例を多く載せて語義を明らかにしようとしたこと、の 2 点です。

これ以前に英国で作られていた辞書は、難語を集めて意味を載せたもの、あるいは百科事典的な解説を加えたものが主流でしたが、ジョンソンの方針はこれとは異なるものでした。日常的に使われることばを広く採録し、その意味と用法を説明したのです。英語の特徴である句動詞を多く掲載したことも、これと無関係ではないでしょう。

また、ジョンソンはひとつの語に対して多くの用例を集め、組織的に分類することを試みました。用例を並べることで、ことばのもつ意味を提示したのです。ジョンソンの辞書には約 4 万語が収録され、例文の数は約 11 万です。ジョンソンの辞書以前にこれほど用例を重視した辞典は存在しませんでした。しかもジョンソンが引用した作品はシェイクスピアをはじめとする高名な作家からそうではない著者まで非常に多岐に渡りました。一人の人間の読書量、もてる知識の限界を考えると、独力でこの作業を完遂したジョンソンの凄さがわかります。ジョンソンの辞書における引用の質の高さは高く評価されています。彼の文学者としての面目躍如たるところです。

後続の辞典への影響

上で述べたようにジョンソンの辞書は豊富な用例を載せましたが、それを年代順に並べるという方法は、規模こそ違いますが後に OED(=Oxford English Dictionary)も採用したものです。ほかに「ひとつの見出し語に複数の語義を番号を付けて記載する」という、現在ではごく普通になっていることも、本格的に採り入れたのはジョンソンが最初でした。ジョンソンの辞書が後の英米辞書編纂に与えた影響ははかりしれません。

何より、今日私たちの考える「辞典」、即ち、ことばの意味と使い方を教えてくれるもの、という意味では、ジョンソンの英語辞典はやはり「最初の英語辞典」と言っていいものでした。ここから始まった流れが後に、英語辞典の最高峰として燦然と輝く OED へ続くのです。

展示資料について

1． A Dictionary of the English Language　1755-1756 年第 2 版復刻版（1967 , AMS）

1755-1756 年発行第 2 版を 1967 年に AMS Press が復刻したものです（タイトルページのみ初版）。展示でページを開いているのはジョンソンの英語辞典を語る際よく持ち出される Oats（カラスムギ）の定義です。

OATS　A grain, which in England is generally given to horses, but in Scotland supports the people.

カラスムギ　穀物の一種　イングランドでは馬に与えられるが、スコットランドでは人間を養う

これはジョンソンのスコットランドへの偏見を表したものとして有名になってしまいました。しかし、16～17 世紀の文献にスコットランドでカラスムギが食物とされている様子が書かれていること、ジョンソンが辞典編纂に際して参考にした園芸辞典等に同様の記述があることなどから、正統的定義であるという意見もあります。

これ以外にもジョンソンはいくつかの語に対して独特の定義をしています。それらを現代的な視点をもって面白く読むことは可能ですが、いずれにせよ、それはこの辞典の歴史的な価値を損なうようなものではありません。

2. A Dictionary of the English Language　簡約版第 6 版（1778, Strahan）

ジョンソンの辞典は初版以来長く版を重ねて広く普及しましたが、実際にその原動力となったのは簡約版でした。初版の翌年には八つ折判の簡約版が出版されています。八つ折判（octavo）とは本のサイズのことです。二つ折判（folio）の親版と比べ、調べるにも持ち歩くにも便利だったことがお分かりいただけるでしょう。展示しているのは初版も手がけた Strahan が 1778 年に出した第 6 版です。これ以降も版を重ね、総発行部数は親版が 7,000 部ほどだったのに対し、簡約版は 40,000 部にもなったといいます。当館ではほかに簡約版第 2 版の復刻版（N833.1-R=62=1～3）を所蔵しています。

（肖像）「サミュエル・ジョンソン」サー・ジョシュア・レノルズ筆、ヒースによる銅版画
『サミュエル・ジョンソン伝』第 1 巻

参考文献　（）内は請求記号

永嶋大典『ジョンソンの「英語辞典」』大修館書店, 1983（N833.1＝156）

永嶋大典『ドクター・ジョンソン名言集』大修館書店, 1984（N937=6）

ヘンリー・ヒッチングス著,田中京子訳『ジョンソン博士の「英語辞典」』みすず書房, 2007 (N833.1=155)

寺沢芳雄『Johnson「簡約英語辞典」解説』(簡約版復刻付録）研究社, 1985 (N833.1-R=62=3)

ハワード・ジャクソン著,南出康世・石川慎一郎訳『英語辞書学への招待』大修館書店, 2004（N833=68）

小島義郎『英語辞書の変遷　英・米・日本を併せ見て』研究社, 1999

本田毅彦『大英帝国の大事典作り』講談社, 2005（N033=23）

J. ボズウェル著, 中野好之訳『サミュエル・ジョンソン伝』全 3 巻 みすず書房, 1981-1983（N930.28=621=1～3）